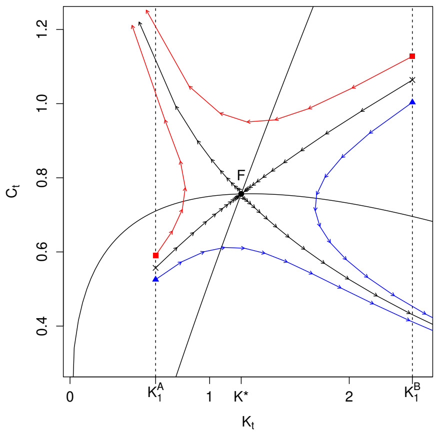
『動学マクロ経済学へのいざない』
正誤表

蓮見 亮

2022 年 8 月 9 日

初版第 1 刷正誤表

箇所	（誤）	（正）
p.10 脚注 7	（差替）	(1.9) 式の両辺から k^* を引くと $$k_{t+1} - k^* = \frac{1-\delta}{(1+g)(1+n)}(k_t - k^*) + \frac{sk_t^\alpha - (g+n+\delta)k^*}{(1+g)(1+n)}$$ となるが，$k_t > k^*$ の場合，$sk_t^\alpha > s(k^*)^\alpha = (g+n+\delta)k^*$，$sk_t^\alpha < (g+n+\delta)k_t$ より $$0 < \frac{1-\delta}{(1+g)(1+n)}(k_t - k^*) < k_{t+1} - k^* < k_t - k^*$$ である．したがって k_t は下に有界かつ単調減少なので k^* に収束する．$k_t < k^*$ の場合も同様に示せる．
p.37 7 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*) = 0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*, \lambda) = 0$
p.37 下から 4 行目	$\min_{\boldsymbol{x}}$	$\max_{\boldsymbol{x}}$
p.38 3 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*) = 0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*, \boldsymbol{\lambda}) = 0$

p.46 脚注 12	（少しの差ではあるが）	（削除）
同	（加筆）	また，(2.48) 式の左辺を 0 とおいて K について解くことにより，K の上限 $K_{\max} = \left(\frac{\delta}{A_t}\right)^{\frac{1}{\alpha-1}}$ が得られる．
p.50 図 2.9	（差替）	
p.50	（脚注追加）	図 2.6 の $\Delta C_t = 0$ は，(2.46) 式の K_{t+1} に (2.43) 式の右辺を代入して $C_t(= C)$ について解くと $$C = AK_t^{\alpha} + (1-\delta)K_t - K^*$$ なので，厳密には右上がりの曲線である．
p.50 下から 4 行目	$K_t \to \infty$ $(t \to \infty)$ となるが，	$K_t \to K_{\max}$ $(t \to \infty)$ となるが（脚注 12 参照），
p.71 2 行目	と (4.27) 式	(削除)
p.122 (6.41) 式	， $\alpha \in \mathbb{R}$	（削除）
p.138 (6.98) 式	$\ln(C_t) + \mu L^{\gamma+1}$	$\ln(C_t) - \mu L^{\gamma+1}$
p.150 10 行目	粘着的	粘着性
p.158 (7.52) 式 1 行目	$\sum_{i=0}^{\infty} \eta \left(\frac{\varrho}{1-\varrho}\right) \pi_{t+i}^2$	$\sum_{i=0}^{\infty} \eta \left(\frac{\varrho}{1-\varrho}\right) \beta^i \pi_{t+i}^2$
同式 2 行目	$\left(\frac{\eta\varrho}{1-\varrho}\right) \sum_{i=0}^{\infty} \pi_{t+i}^2$	$\left(\frac{\eta\varrho}{1-\varrho}\right) \sum_{i=0}^{\infty} \beta^i \pi_{t+i}^2$
p.158 (7.53) 式	$\sum_{i=0}^{\infty} \pi_{t+i}^2$	$\sum_{i=0}^{\infty} \beta^i \pi_{t+i}^2$

p.168 下から 5 行目	ボレル集合族 $\mathcal{B}$	$\mathbb{R}$ 上のボレル集合族 $\mathcal{B}$
p.190 下から 2 行目	ただし，次節の例では R は $\boldsymbol{\theta}$ に依存しない.	（削除）
p.192 (8.72) 式	$, \quad R = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{bmatrix}$	（削除）
p.192 下から 2 行目	Blanchard and Kahn の方法	Sims の方法
p.193 (8.73) 式	R	$R(\boldsymbol{\theta})$
p.199	[2] に追記	（邦訳：和合肇・松田安昌 訳『状態空間モデリングによる時系列分析入門』シーエーピー出版，2004）
	[11] に追記	（邦訳：赤堀次郎・原啓介・山田俊雄 訳『マルチンゲールによる確率論』培風館，2004）

初版第 2 刷正誤表

p.10 脚注 7	（差替）	(1.9) 式の両辺から k^* を引くと $$k_{t+1}-k^* = \frac{1-\delta}{(1+g)(1+n)}(k_t-k^*) + \frac{sk_t^\alpha-(g+n+\delta)k^*}{(1+g)(1+n)}$$ となるが，$k_t>k^*$ の場合，$sk_t^\alpha > s(k^*)^\alpha = (g+n+\delta)k^*$，$sk_t^\alpha < (g+n+\delta)k_t$ より $$0 < \frac{1-\delta}{(1+g)(1+n)}(k_t-k^*) < k_{t+1}-k^* < k_t-k^*$$ である．したがって k_t は下に有界かつ単調減少なので k^* に収束する．$k_t<k^*$ の場合も同様に示せる．
p.37 7 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*)=0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*,\lambda)=0$
p.37 下から 4 行目	$\min\limits_{\boldsymbol{x}}$	$\max\limits_{\boldsymbol{x}}$
p.38 3 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*)=0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\boldsymbol{x}^*,\boldsymbol{\lambda})=0$
p.122 (6.41) 式	，$\alpha\in\mathbb{R}$	（削除）
p.150 10 行目	粘着的	粘着性
p.190 下から 2 行目	ただし，次節の例では R は $\boldsymbol{\theta}$ に依存しない．	（削除）
p.192 (8.72) 式	，$R=\begin{bmatrix}0&0&0\\0&0&1\\0&0&0\\0&1&0\\1&0&0\end{bmatrix}$	（削除）

p.192 下から 2 行目	Blanchard and Kahn の方法	Sims の方法
p.193 (8.73) 式	R	$R(\boldsymbol{\theta})$
p.199	[2] に追記	（邦訳：和合肇・松田安昌 訳『状態空間モデリングによる時系列分析入門』シーエーピー出版，2004）
	[11] に追記	（邦訳：赤堀次郎・原啓介・山田俊雄 訳『マルチンゲールによる確率論』培風館，2004）